

序言

国際日本文化研究センター（日文研）は、2011年5月27～29日に復旦大学において、第18回海外シンポジウム「江南文化と日本——資料・人的交流の再発掘——」を同大学日本研究センターと共催した。本書はそのシンポジウムで発表された論文と、事後に提出された評論を集めた報告書である。使用言語は発表者が執筆に使用した通りとし、日本語論文の編集は山田奨治が、中国語論文は郭南燕が担当した。

本シンポジウムでは、新資料の発掘と活用を通して、江南地域と日本の文化交流に対する研究を一層深めることを目的とした。前近代の日中間において、中唐以後にもっとも長く交流の窓口とされたのは、浙江から長江南岸部である。したがってこの時代に日本に伝わった文化も、その周辺地域のもものが中心で、特に16世紀まではその傾向が顕著だった。近代においても、上海などの国際都市やその衛星都市は、中・日・欧の文化が触れあい、混交する舞台となった。その具体相については歴史、宗教、貿易、建築、文学、言語、芸術、環境、政治、外交などの角度から、すでに数多くの研究が長い間行われている。これらの研究進展の背景には、日中における新たな研究資料の搜索・整理や、従来から知られていた資料の再評価・紹介があることはいうまでもない。

シンポジウムでは、そのような研究現状を踏まえ、日文研の末木文美士教授と北京大学の嚴紹盪教授による基調講演につづき、「文人と文化」「宗教」「歴史」「建築」「貿易」「芸術」「文化交流」の各セッションが行われ、日本・中国・台湾から28件の研究発表と討議があった。参加者は中国南部の研究者を中心に、実数で約80名にのぼった。

本シンポジウムを通して、日本と中国の諸研究機関が積み重ねてきた、資料の発掘・活用・解釈の成果を共有し、専門度の高い学術交流を図ることができた。その成果をここに公表することにより、中国南部における日本文化の研究の動向を知らしめる一助になれば幸いである。

第18回海外シンポジウム実行委員長

山 田 奨 治